

＝乳蛋白質率に注意してみよう＝

残暑も過ぎ、やっと涼しくなったと思ったら、もう冬支度が必要な季節です。この時期の乳牛は、暑熱で夏バテしていたものも回復する時期です。しかし、夏バテから周産期病等を発症し、淘汰されてしまう牛が意外と多いのもこの時期なのです。そこで、今回はそのようなことにならないように、乳牛の健康管理として特に乳蛋白質率に注目してみます。

+++++
+ 個体検定日成績の乳蛋白質率と乳牛の健康管理の基本 +
+ 検定成績の乳蛋白質率が高い → 栄養十分で健康な乳牛 +
+ 検定成績の乳蛋白質率が低い → 栄養不足な乳牛 +
+ 乳蛋白質率は季節変動が大きいので、目安が変動します。今の時期なら +
+ 3. 2 % 以上は欲しいところで、3. 0 % 以下は栄養不足です。 +
+++++

さて、分娩直後はなかなか食欲も上がらず、一般に分娩直後の乳蛋白質率が低いことはよく知られています。しかし、分娩後 60 日を過ぎて、授精を開始する時期になっても、乳蛋白質率が 3. 0 % を下回っている場合は、エネルギー不足から良い発情が来ません（鈍性発情）。また、極端に栄養不足ですとケトーシス等の周産期病の原因にもなります。

そこで、分娩後なるべく早く食欲を回復させ、乳蛋白質率を高めることが必要になります。濃厚飼料の増給が基本ですが、乳蛋白質率が低いならと、安易に飼料中の蛋白質の多い豆科などの飼料を多給するのは誤りです。余分な飼料中の蛋白質は、アンモニアとなり、さらには BUN（血中尿素窒素）となります。BUN は、繁殖障害を引き起こします。この BUN は乳中に移行して、MUN（乳中尿素窒素）となりますので、MUN が 16 mg を越えるものは繁殖障害を起こす可能性が高まっていることを意味します。

それでは、分娩後に早期に食欲を回復させ、乳蛋白質率を適正に回復させるに

はどうすればよいのでしょうか？そのための準備は分娩前の乾乳期さらには、前産の泌乳後期に始まります。乾乳期を過肥としないためには、その前の泌乳後期に十分にボディーコンディションを調整する必要があります。そのうえで、分娩前2～3週間前に濃厚飼料給与量の徐々に増給し、濃厚飼料への馴致を行います。この馴致は反芻胃（ルーメン）の絨毛を発達させ、分娩後の栄養吸収を活発にする意味もあります。ただし、高蛋白質の豆科の飼料の多給は控えます。

分娩後は良質粗飼料とともに、十分に濃厚飼料を与えます。濃厚飼料の不足が乳蛋白質率の低下の原因ですが、慢性的に食い込みが悪く分娩後の乳蛋白質率が回復しない場合は、原因は別なところにある場合もあります。例えば、肢蹄を故障している場合や、隣の乳牛に盗食されている場合、群飼では喰い負けしている場合など、いろいろな要因が考えられますのでひとつひとつ確認してみてください。

平成24年 10月 （社）家畜改良事業団 電子計算センター
